

清流	關屋貞三郎氏藏	天馬奮迅	目録外出品
蓬萊仙閣	白崎榮次郎氏藏	瀟峽之春	寂寥
秋興	上田佑二氏藏	高原之秋	六曲屏風一雙
網代守	藤井彦四郎氏藏	寫生	某氏藏
不老富貴	同	上高地 櫻梅 松	老梅 未完成
延命地藏	伏原利造氏藏	鐘ヶ御崎 鹽原 島々谷 筑後川 高千穂峽 櫻鳴 日向神ノ岩山 種高	六曲屏風一隻
			山元清秀氏藏
			橋本辰二郎氏藏
			矢代仁兵衛氏藏

川村清雄氏の訃

明治初期の洋風畫家で現存する最年長者であつた川村清雄氏は、晩年尙畫筆を振ひ健在を示してゐたが、去る五月十六日八十三歳の高齡を以て長逝した。奈良縣丹波市町天理教本部に在つて其の教祖の畫像を製作中のことであつた。舊幕臣の家で、嘉永五年江戸に生る。明治四年徳川家達公に隨從して渡米したが後伊太利に渡り、ヴェネチアに滯留して繪畫修業をした。在外十年の後歸

書評

古休伯長信の研究 (雙杉五月號)

結城素明氏が繪事の餘暇文筆に親しみ、嘗て『東京美術家墓所考』を編著したことは、當時本誌本欄に於ても是れを紹介したが、今また氏は此の掃墓を機縁として、古休伯長信の生涯に就いて精細なる研究を志し其の結果を雜誌『雙杉』五月號に發表された。記載するところ同誌の全冊九十頁に及び、篇を分つこと八章、從來の長信説、休伯家の墓所と過去帳、長信の墓石と歿年、長信傳の疑問、長信の畫業及び門流其他に互つて周到なる敘述を運ばれたことは、我

朝、印刷局に勤め、又中六番町に畫學校を開き生徒を集めて教授したこともあつた。日本人の描く洋畫は日本趣味でなければならぬとて、種々の試みをなしてゐた。明治美術會の創立にも参加し、明治三十五年には五姓田芳柳氏等とトモエ畫會を組織して年々春秋に展覽會を開いてゐた。文展創始後は次第に時世に取殘された觀があつて、近年は畫壇の中心から遠ざかつてゐた。換言すれば川村氏の功績は明治時代に夙く果されたのであつた。併し最後まで畫業を離れなかつたことは上述の如くであり、聖徳記念繪畫館には徳川公奉納の「振天府」を遺した。門下に東城鉦太郎、石川欽一郎、織田一磨の諸氏がある。(青山)

るものは、谷中信行寺に於ける墓所及び過去帳、休伯家の後裔狩野重次家に傳ふる過去帳及び靈名記、玉燕本及び玉榮本狩野系圖、玉燕玉榮等の先祖書由緒書、中橋狩野家に傳ふる元和九年の長信以下の血判誓書等多數の新資料に及び、剩え長信夫妻の肖像までも擧ぐるに至つて居る。而して氏は是等の新資料に依つて在來の學者の長信文獻の不備を指摘し、先づ歿日の承應三年十一月十八日を寧ろ十月に正すべきを論じ、享壽に就いては從來の七十八歳説の外に七十五歳説あることを説き、或は法眼敘任説を駁し、松榮四男説を樹て、また江戸下向に關する經緯を詳説する等從來の文獻を訂正補説し得たものは甚だ多く、特に此の遺蹟の殆んど湮滅して傳ふる所のない巨匠に、天保の摸本なりとは云へ、西丸御座之間衝立七福神圖を搜求し得たことは我々にとつて最も興味があると